

コミュニケーション方略の指導

——「方略シラバス」の構想——

高 塚 成 信

1. はじめに

コミュニケーション能力を構成する重要な要素とされる「方略的能力」(Canale and Swain 1980, Canale 1983) に関して、これまで多くの研究がなされてきた (Tarone 1977, Blum-Kulka and Levenston 1978, Váradi 1980, Færch and Kasper 1980, 1983, Tarone 1984, Ellis 1984, Poullisse et al. 1984, Paribakht 1985, Kellerman et al. 1986, 1987, Tarone and Yule 1989, Poullisse 1990, Bialystok 1990, Yule and Tarone 1990, Takehara 1992, Nakano 1993, Fukuda 1994)。しかしそれらは、コミュニケーション方略の定義と分類, 第2言語学習者のコミュニケーション方略使用の実態の把握, 使用する方略の選択に影響を与える要因 (第一言語, 言語能力, パーソナリティ, 目標概念, タスク, コンテキスト内の競合する指示物の有無) などに関する研究を中心とするものであり, 必ずしも教育上の示唆を十分に与えるものではなかった。

すなわち, それらの研究は, コミュニケーション能力を養成することを目的とする指導において方略的能力の指導を含めることが必要であるという指摘やコミュニケーション方略を実現する言語的リソースを指導する必要があるという提案にとどまっているものが多く (e.g. Canale 1983, Tarone 1984, Tarone and Yule 1989, Dörnyei and Thurrell 1991), より具体的な教育内容や指導方法を示そうとしたものであっても (Willems 1987, Nelson 1989, 平野 1992, 1993, 高塚 1993, Konishi 1994a, 小西 1994b, Armington 1994), 指導に用いる活動, タスクを断片的に提案したに過ぎなく, コミュニケーション方略を指導するためのシラバスや教材を検討, 作成したものは, 今のところ殆どないのが実状である (Tarone and Yule 1989: 114)。

そこで本論は, コミュニケーション方略のうち, 比較的意思伝達上の効率が高いと思われる「言い換え (パラフレイズ)」について, 通常名詞で表現される概念に限定して, パラフレイズにはどのようなプロセスが含まれているのか, また, それはどのように言語的に実現されるのかを明らかにすることを通して, パラフレイズというコミュニケーション方略の使用を指導する際のシラバスを作成すること, すなわち, コミュニケーション方略の指導を英語を教えることの一つの教育内容領域として設定することの可能性と問題点とを検討することをその目的とするものである。

概念, 機能 (e.g. 依頼) をその構成原理とするシラバスを「概念・機能シラバス」(notional/functional syllabus) と呼ぶ (Wilkins 1976) ことに習って, コミュニケーション方略 (e.g. 言語表出面では「言い換える」(パラフレイズする) こと, 言語理解面では「聞き返す」こと) を構成原理とするシラバスを「方略シラバス」(strategic syllabus) と呼ぶことにする (表1)。それは, 言語理解・表出上の「問題」から「解法」へ至るプロセスを大切にシラバスであるが, 従来のシラバスに取って代わる (replace) ものではなく, 相補う (supplement) ものと位置づけられる必要がある。

また、従来のシラバスが、学習者に如何に問題状況を与えないかということに注意を払ってきたのに対して、コミュニケーション方略の指導のためには、むしろ学習者に如何に問題状況を与えるのかを考えなければならないという Chen (1990:179-180) の指摘を考慮すると、方略シラバスは、従来の問題予防型に対して問題直面・解決型のシラバスになるものと思われる。

概念・機能シラバスにおいて、ある言語機能、例えば「依頼」を言語的に実現する多様な表現は、文法的複雑さと社会言語的適切性の程度において異なっているのと同様に、方略シラバスにおいては、ある方略、例えば「パラフレイズする」「聞き返す」を言語的に実現する多様な表現は、文法的複雑さと意思伝達上の効率の程度において異なっている。

また、ある言語表現の社会言語学的適切性に影響を与えるのは、話し手と聞き手の役割関係を初めとするコンテキスト内の所要因であるのと同様に、ある言語表現の意思伝達上の効率に影響を与えるのもやはり、聞き手の言語知識及び世界知識や競合する指示物の有無などを初めとするコンテキスト内の諸要因であると考えられる。

表 1 Functional Syllabus と Strategic Syllabus

Functional Syllabus

intention	functions	linguistic realizations
相手にある行為をさせる (e.g. open the window)	依頼する	Open the window. Please open the window. Could you open the window? I wonder if you could open the window.

Strategic Syllabus

problem	strategies	linguistic realizations
<u>production</u>		
単語が思いつかない (e.g. ostrich)	言い換える	a kind of bird a bird that can't fly a very large bird with a long neck a very large African bird with a long neck and long legs, which can run very fast but which cannot fly
<u>comprehension</u>		
聞き取れない (e.g. I saw <u>a bear</u> .)	聞き返す	Pardon?/What?/What did you see?/You saw what?

ここで先ず、「パラフレイズ」というコミュニケーション方略が、これまでのコミュニケーション方略分類法上どのように位置づけられてきたのかを概観しておきたい。

2. コミュニケーション方略分類法上の「パラフレイズ」の位置

コミュニケーション方略の一つとしての「パラフレイズ」の定義・内容や位置づけは、

これまでに提案されたコミュニケーション方略の分類法によって様々である。

Tarone (1977:198) は、パラフレイズを非常に広義に、「あるメッセージを、それを表す適切な言語形式や構造を知らないか、知っていても未だ知識として定着していない状況で、それに代わる容認可能な (acceptable) 目標言語構造で言い換えること」と定義し、下位方略として approximation, word coinage, circumlocution を含むものと捉えているが、それ以後の分類法ではかなり狭義に (すなわち, circumlocution と同義に) 捉えられている (Bialystok 1990:41)。

例えば, Blum-Kulka and Levenston (1978) は, approximation をその下位方略として含む overgeneralization を paraphrase とは区別している。また, circumlocution を paraphrase とは区別し, 前者が, 「コンテキストの有無や如何に関わらず, 目標となる語彙項目が有する全ての意味的特徴を明示するもの」であるのに対して, 後者は, 「コンテキストによって要求される意味的要素でさえ全部を明示するとは限らないもの」(おおよそ同じ意味を表す語で置き換える手段) と定義している。

また, Færch and Kasper (1980) は, paraphrase を generalization や word coinage とは異なる方略として区別しながらも, description と exemplification を paraphrase の下位方略として含めている。Váradi (1980) は, generalization と approximation (word coinage を含む) とを, また circumlocution と paraphrase とを区別している。

これまでで最も詳しい分類法だと思われる Paribakht (1985) は paraphrase という用語を用いてはいないが, superordinate, comparison, circumlocution, exemplification, metonymy (換喩) などとして, コミュニケーション上の問題解決の2つのアプローチ (すなわち「言語的」と「概念的」) にまたがる下位範疇として設定しているようである。

同様に, paraphrase という用語を用いない Kellerman et al. (1986, 1987), Poullisse (1990) は, それまでの分類法では, 各方略の定義が曖昧な上に (すなわち, かなりのオーバーラップがあった), コミュニケーション方略そのものとその言語的実現とが区別されず, 表層の言語的特徴に捕らわれた分類 (「プロダクト中心」の分類法) になっていると批判し, 方略の選択および使用のプロセスを重視した新たな分類法 (「プロセス中心の分類法」) を提唱した。

そこではまず, 主たる方略が conceptual と linguistic とに分けられ, さらに前者は, holistic (approximative/approximate) と analytic とに, 後者は transfer と morphological creativity とに分類されており, 狭義の paraphrase は analytic に, 広義には analytic, holistic 両方にまたがるものと捉えられていると考えることができる。ここで holistic とは, 伝達を意図する概念と潜在的に属性(要素)を共有する概念に置き換えるものを, analytic とは, 概念の属性(要素)を分析して述べるものを意味する。

このプロセス中心の分類によると, 例えば Blum-Kulka and Levenston (1978) が superordinate terms の使用と approximation とを異なる下位方略としているが, 前者は言い換えを実現する表層の言語的特徴を基準にした範疇であるのに対して, 後者は言い換えへのアプローチを基準にした分類であり, 同じ分類法の中で複数の分類基準が設けられているという問題があるということになる。同様に, 例えば balloon (Váradi 1973の例) /art gallery (Ellis 1994:396の例) が言えないために, それぞれ airball/picture-place と言ったなら word coinage に, ball with air/place where you look at pictures なら paraphrase/circumlocution に分類する伝統的な分類法は, 表層的な構造(言語的実現)の違いに捕らわれており, 両方とも ball および air/place および picture という2つの要素に言及することによって「風船」「美術館(画廊)」という概念を伝えようとする認知的プロセス(=analytic)は同じであるという事実を見失うことになるとしている。

しかしこのことは、伝統的な分類法がプロセス的な要素を全く無視していることを意味するものでは決してなく、事実、approximation, circumlocution, generalization, description, exemplification, comparison など、認知的プロセスを表す範疇が多数設定されているのである。

そこで、本論では、「パラフレイズ」を、Tarone (1977) が用いた広義の意味で捉え、しかも文法的に容認可能な言い換えに限定して考察するが、方略の分類にあたっては、Kellerman et al. (1986) (1987) の枠組みに従いながらも、holistic/analytic より下位レベルのプロセスや言語の実現に関しては、Paribakht (1985) を初めとした従来の分類法に見られる範疇を利用することにする。

3. パラフレイズのプロセス

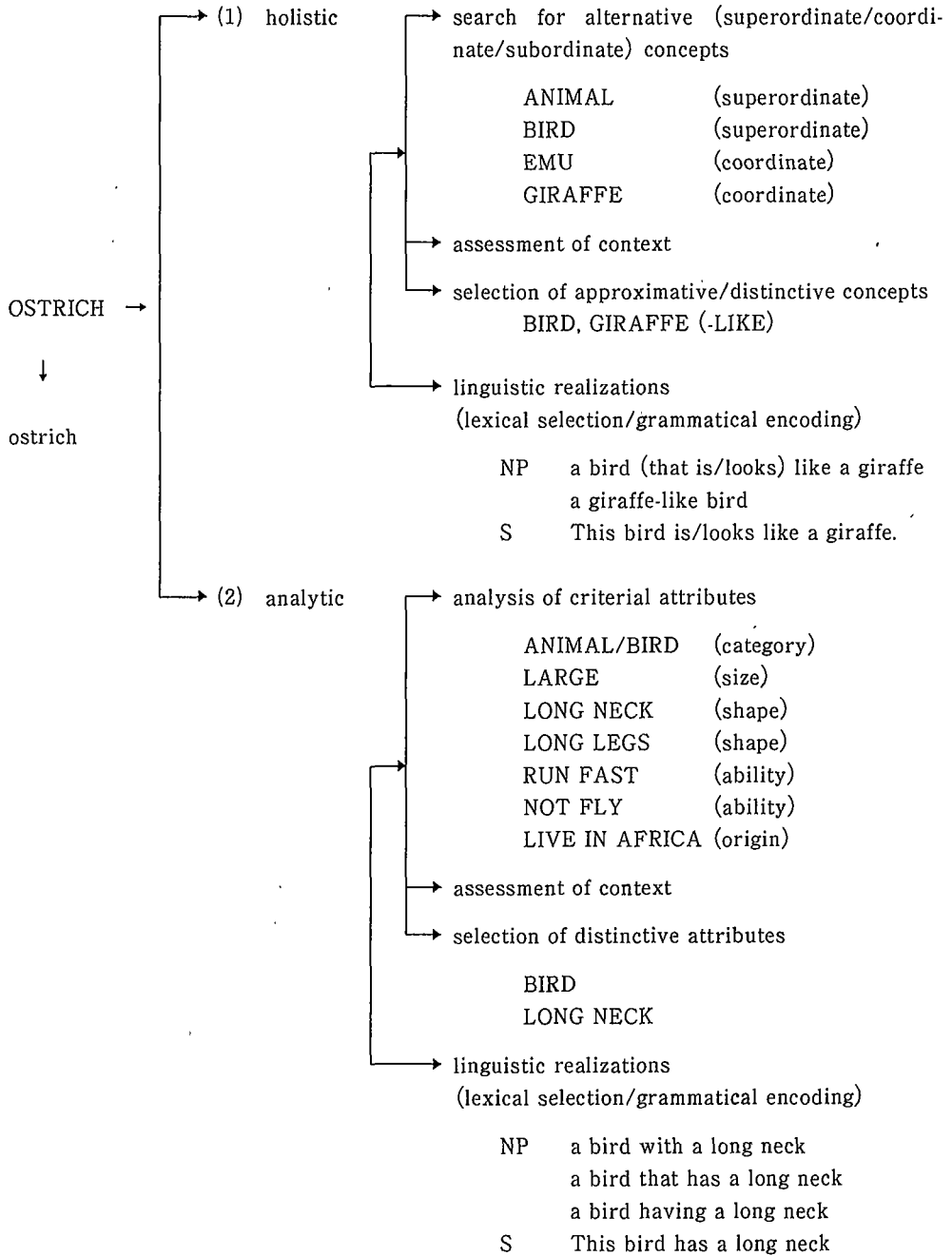
では、パラフレイズとはどのようなプロセスなのだろうか。ここでは、意図した概念が OSTRICH の場合を例に、Levelt (1989) の speech production のモデルを参考にして図示して検討することにする (図 1)。なお、Levelt (1989) に従って、大文字は概念、小文字はそれを表す言語項目を示す。

まず、holistic の場合には、目標概念に代わる目標概念と潜在的に属性/構成要素を共有する概念 (それらは目標概念との関係によって superordinate/coordinate/subordinate に分けることができる) (e.g. sup=ANIMAL, BIRD, co=EMU (BIRD(category)), LARGE (shape), NOT FLY (ability) を共有), GIRAFFE (LONG NECK (shape) を共有), sub=Ø) を探し、聞き手の言語知識及び世界知識、競合する指示物 (概念) (distractor) の有無を初めとするコンテキスト内の諸要因を考慮に入れて、approximative/distinctive concepts, すなわち、伝達を意図する概念とコンテキストの中で聞き手が特定できる程度に属性/構成要素を共有する (近似) 概念を選択し (e.g. BIRD/GIRAFFE-LIKE) (これが、Levelt (1989) の言う conceptualizer で生成された message の基礎になる), それを自分の言語能力に見合った形で言語化する (formulator での lexical selection/grammatical encoding にあたる) (e.g. NP: a bird (that is/looks) like a giraffe, a giraffe-like bird, S: This bird is/looks like a giraffe.)。選択した概念が言語化できない場合、すなわち、formulator に送られた message が言語化できない場合には、選択する近似概念を再検討するというフィードバックが生じる。

また、analytic の場合には (といっても、holistic と analytic とは段階的に生じるのではなく、同時進行していると思われるが)、伝達を意図する概念の criterial attributes (コンテキストによらず、それ自体で何であるのかを自律的に判断できる基準になるような属性 (要素)) (Kellerman et al. 1986, 1990:166) (e.g. ANIMAL/BIRD (category), LARGE (size), LONG NECK (shape), LONG LEGS (shape), RUN FAST (ability), CAN'T FLY (ability), AFRICAN/LIVE IN AFRICA (origin) を探りながらも、前述のコンテキスト内の諸要因を考慮に入れて、コンテキストにおいて聞き手がその概念を他の概念と区別するのに十分だと判断する属性 (要素) (distinctive attributes) を選択し (e.g. BIRD, LONG NECK), 自分の言語能力に見合った形で言語的に実現する (e.g. NP: a bird that has/with a long neck, S: This bird has a long neck.)。

その際、holistic の場合と同様、選択した概念が言語化できない場合には、選択した概念を見直すか、あるいは、そのままそれらの概念について holistic/analytic なプロセスで第 2 段階目のパラフレイズを試みることになる (subordinate strategy)。例えば、LONG

図1 パラフレーズのプロセス



NECK の NECK が言語化できない場合には, holistic に, (不適切にも) NP: a bird with/that has/having a long head, S: This bird has a long head. とするか, analytic に NP: a bird with/that has/having a long part of the body that connects the head to the shoulders, S: This bird has a long part of the body that. . .)と言語的に実現されるかも知れない。

このように, analytic プロセスには, 1 次的な analytic というプロセス中に 2 次的な holistic/analytic が (またその中に 3 次的な) プロセスが埋め込まれる (embedded) という循環的な (cyclic) 性質を潜在的に持っている (Kellerman et al. 1987:107)。循環が続くとパラフレイズが発話者にとって困難になるばかりではなく, 聞き手にも理解困難になる危険性を持っている。

また, 選択された概念が言語化できる場合でも, 最終的にどのように言語的に実現されるのかは, 話し手の文法能力に大きく依存している。属性 (要素) として LONG NECK を選択しても, a bird that has a long neck とせずに This bird has a long neck. とするのは, 関係代名詞による後置修飾構造使用という文法上の問題を回避することが誘因になっている可能性がある (もちろん聞き手の言語能力への配慮も考えられる)。(類例: 既に述べたように, art gallery が言えなくて, analytic に, その属性 (要素) として PLACE, PICTURES を選択したとしても, a place where you look at pictures とせずに, picture-place とするのは, 文法の問題を回避するためであると考えられることができる。)

また, 言語化する情報の選択 (・言語化) に際しては, Grice (1975) の maxims of quantity (「必要な情報を過不足なく与えよ」) の予測とは異なり, 必ずしもコンテキストから要求される必要最小限の distinctive attributes に言及するのではなく, 必要とされる以上の情報を選択する (overspecification) 傾向があると思われる (Levelt 1989:129-134)。すなわち, 聞き手と共有するコンテキスト内に「鳥」が他にいなければ, 「ダチョウ」に言及するのに, the bird で十分なのに, the bird with a long neck と詳しく言う傾向がある。これは, より確実な意思伝達をしたいという願望に動機づけられたものであろう。逆に, 言語能力の制約から, 最小限必要な distinctive attributes さえ言語化できないことも多い (underspecification)。

4. パラフレイズの実際

では, 通常名詞で表される概念について, パラフレイズの実際を検討するが, そこに見られるプロセスと言語的实现の全てがパラフレイズ指導のための教育内容 (シラバス) を構成する潜在的可能性を持っていると考えてよい。プロセスについては, 既に第 1 言語で習得されているが, 意識化させる必要があると思われる。

例 1～例 4 (表 2) では, DONKEY/AMPHIBIAN/PROTRACTOR/DENTIST という概念のパラフレイズの例を挙げたが, 当然のことながら, 概念によって, holistic では, 上位, 等位, 下位のどの概念が選択できるのか, また analytic では, 概念のどのような属性 (要素) (physical property (color/size/shape), functional property, locational property) を選択することができるのかが異なっている。また, 選択した概念と言語的实现との間には, 通常 1 対 1 の対応はない。

表2 パラフレーズの例：具体的指示物のある単独概念の場合

Example 1 intended concept: DONKEY

holistic

superordinate	(This is) an animal, a kind/type of animal
coordinate	(This is) a horse, a kind/type of horse
subordinate	Ø
combination ((sup) + co)	(This is) a horse-like animal/an animal (that is/looks) like a horse This (animal) is/looks like a horse.

analytic

physical

color	(This is) a gray or brown animal/horse This (animal/horse) is gray or brown.
size	an animal (that is) smaller than a horse This (animal) is smaller than a horse.
shape	(This is) an animal/horse with long ears/that has long ears This (animal/horse) has long ears. The ears of this animal/horse are long.

functional

an animal (that is) used for riding and carrying goods
This (animal) is used for. . . /We use this (animal) for. . .

combination

a gray or brown animal like a horse, but smaller and with longer ears
This (animal) is/looks like a horse but is smaller and has longer ears.

Example 2 intended concept: AMPHIBIAN

holistic

superordinate	(This is) an animal, a kind/type of animal
coordinate	(This is) not a reptile
subordinate	(This is) a frog
combination (sup + co)	an animal such as a frog A frog is an example of this type of animal.

analytic

locational

an animal(, such as a frog) (that is) able to live both on land and in water
This (type of) animal is able to live both on land and in water.
We can see this (type of) animal both on land and in water.

Example 3 intended concept: PROTRACTOR**holistic**

superordinate	(This is) an instrument, a kind/type of instrument
coordinate	(This is) not a ruler
subordinate	Ø

analytic

physical (shape)	an instrument in the form of a half-circle a half-circle instrument The shape of this instrument is a half-circle.
functional	an instrument (that is) used for measuring angles This instrument is used for. . . We/You use this instrument for. . .
combination	an instrument, usually in the form of a half-circle, which is used for measuring and drawing angles

Example 4 intended concept: DENTIST**holistic**

superordinate	(This person is) a doctor, a type of doctor
coordinate	(This person is) not a physician/pediatrician
subordinate	Ø

analytic

functional	a person whose job is to look after people's teeth This person's job is to examine and treat people's teeth. This person examines and treats people's teeth.
subject	(This person is) a tooth doctor

holistic/analytic のプロセスの区別について、例えば、OSTRICH/DONKEY のパラフレイズの場合、a giraffe-like bird/a horse-like animal や a bird like a giraffe/an animal like a horse, a bird that looks like a giraffe/an animal that looks like a horse をここでは holistic としたが、「キリンに似ている」、「馬に似ている」ということはそれぞれ「ダチョウ」、「ロバ」の特性でもあると考えることもできる。しかし、coordinate (等位概念) を例として出すことによってその criterial attributes (「首が長い」「乗用である」) に言及することを避けようとするという意味で holistic と考える。事実、Kellerman et al. (1987:110) は、it looks like a UFO を holistic としている。

すなわち、「首が長い」というダチョウの criterial attribute に明示的に言及する代わりに、「首が長い」ことが同じくその criterial attribute である「キリン」を例として用いたものと考えることができる。ただし、聞き手が「キリンに似ている」ということで推測する属性(要素)は、「首が長い」ということではなくて、例えば「黄色い」ということかも知れず、伝達上のリスクがある。

また、analytic と分類しているものの多くは、superordinate 概念の言語化を含んでおり、それらを holistic + analytic と分類することも可能であるが、Poullisse (1990:111) に従って、全て analytic と分類した。

このような分類上の問題点は、そもそも holistic/analytic という二分法自体に問題があ

るのかもしれない。すなわち, holistic で選択される ANIMAL/BIRD (category という属性(要素)であると考えることができる)や, さらには, GIRAFFE-LIKE (「キリンに似ていること」)も, その他の属性(要素)同様 ostrich の属性(要素)であると捉えれば, holistic も analytic も, 数々の属性(要素)の中から必要な属性(要素)を選択し言語化する同一のプロセスであると考えられることもできる。

さらに, 「属性」(要素)という考えが適切なのか, あるいは, プロセスと言語的実現の区別が必ずしも明確には行えないのではないかとと思われる事例がある。

すなわち, 例5～例7(表3)に示した(具象度の低い)名詞的概念や他の概念と共起する場合のパラフレイズの例を見ると, holistic/analytic どちらのプロセスによるものなのか, 目標概念についてどのような属性(要素)の分析が可能なのか不明瞭である。あるいは, 同一概念の異なる言語的実現に過ぎないものなのかも分からない。もっとも, 「言い換え」は, プロセスの相違と言語的実現の相違両方によってなされるものであるから, どちらにしてもこのような例に見られる言い換えを指導する必要があることにはかわりない。

例えば, 例5のように, 通常単独の名詞で表される概念を間接疑問文で表すのは, holistic か, それとも analytic か, analytic だとすると, LENGTH が, LONG/HOW (長さ = 「長い」 + 「程度」)の2つの「属性」(要素)を持っていると考えるのか。あるいは, length と how long X is とは, 同一概念を異なった文法形式・言語構造を使って実現したものに過ぎないのか。既に述べたように, airball と ball with air の違いが, 概念選択のプロセスではなく同一概念の言語的実現にあるとするのであれば, length と how long X is も同様であると考えなければならないかもしれない。

population を how many people live とした場合には(例6), 「人口」 = 「住む」 + 「人」 + 「数」という「属性」(要素)分析ができそうで, the number of people who live/living 同様, 分析的プロセスの異なった言語的実現と考えなければならないであろう。

また, 複数の概念, 例えば, WHAT/LENGTH (OF X)を伝達する場合(例7), What is the length of X? と How long is X? は, 同一概念の異なった言語的実現と考えられるが, Is X 10cm long or...? や Y is 8cm long. How about X? では, 「10センチ」, 「Yの長さ」という概念が例として選択されており, 全体として holistic な言い換えになっていると考えてよいと思われる。

次に, 英語にはそれを表す言語的手段がないとされる「Xの背の高さ」「何番目」(「クラス」)の場合(例8), 例7同様に例を出す場合(holistic)と, 「Xの背の高さ」「何番目」 = 「何人」 + 「Xの背の高さ」 + 「より高い」という具合に, 「何番目」を2つに分析する場合(analytic)とが考えられる。

また, 「分度器」及び「借りる」という2つの概念を一緒に伝える場合(例9)に, 例えば, Could you lend me your protractor? のパラフレイズとして I want to measure angles. とした場合の, measure angles は, 「分度器」の属性(要素)を分析的に表現したものであろうが, 全体としてみると, 「分度器」を「借りたい」が「角度」を「測りたい」という holistic な言い換えになっているとも考えることができる。

例10でも, 「話題」を「変える」ということが「別のこと」を「話す」というそれぞれの概念について holistic な言い換えになっていると考えられることができる。

従来, 単独の名詞的概念(指示物)について, それらと共起するであろう他の概念と切り放して, どのようにパラフレイズするのかのみが研究の対象とされてきたが, 実際にはその他の概念との関係で総合的にパラフレイズする必要性も高く, 方略シラバスで必ず扱わなければならないものであると思われる。

表 3 パラフレイズの例：具体的指示物のない単独概念および複合概念の場合

Example 5 intended concept: LENGTH (OF X)

length	how long X is
--------	---------------

Example 6 intended concept: POPULATION (OF X)

population	the number of people living/who live (in X) how many people live (in X)
------------	--

Example 7 intended concepts: WHAT/LENGTH (OF X)

What's the length of X?	How long is X? Is X 10cm long or...? Y is 8cm long. How about X?
-------------------------	--

Example 8 intended concepts: WHAT NUMBER/HEIGHT (OF X) (/IN CLASS)

Ø	Y is the third tallest (in his class). How about X? Is X taller than any other student (in his class)? Is X the tallest (of all the students) (in his class)? How many students are taller than X (in his class)?
---	--

Example 9 intended concepts: LEND/PROTRACTOR

Could you lend me your protractor?	I want to measure angles.
---------------------------------------	---------------------------

Example 10 intended concepts: CHANGE/TOPIC

change the topic	talk about something else
------------------	---------------------------

5. 下位方略を言語的に実現するためのリソース

次に、パラフレイズの下位方略を実現する言語的手段を見てみると、共通した項目があることに気づく。例えば、superordinate terms がそれである。このような基本的な語彙は、power vocabulary (Canale 1983), core vocabulary (Tarone 1984), あるいは procedural vocabulary (Robinson 1989) 等と呼ばれてきた。

Konishi (1994a) は、学習英英辞典 (*Longman Active Study Dictionary of English*) の名詞2,000語の定義文の分析から、superordinate terms や修飾構造においてよく使用される言語構造・項目を抽出した。それらを参考にして頻出する言語項目を挙げると表4のようになる。これらが、方略シラバスの言語内容の一部となる。

ただしこれらには、パラフレイズに役立つものが多いものの、全てそのままの形で使えらるべきではない。これまでの研究 (e.g. Konishi 1994a) では、あたかも英英辞典の定義がそのままパラフレイズに用いることができる、用いる練習をさせるのがよいと考える傾向があった。しかし、先に述べたように、ある概念は、単独ではなく、他の概念と一緒に表現されなければならない場合が多い。例えば、X の職業を言う場合、辞書の定義部分をそのまま結合させて、X is a person whose job is V-ing. などと言うことはなく、X's job is V-ing/X Vs という形で使われるものと思われる。

幾つか方略シラバスに含めるべきだと思われる言語項目を検討する。まず, [sup + like + co/sub + but + comparative + with/without] という構造は, 広範に使えると思われる (e.g. an animal like a horse but smaller and with longer ears/ (ASS), an animal like a monkey, but larger and without a tail (APE), 同様に, a large black animal, like an elephant, but smaller and with either one or two horns on its nose (RHINO) と言えそうである)。このような構造を使って, 様々な概念をパラフレイズする練習は, 構造・文法シラバスで, 比較級を学習するときに行うことができる (→構造・文法シラバスとの融合)。

また, 概念 (指示物) の機能 (functional property) に言及するのに便利な (used) for V-ing の for V-ing は中学校の英語教育の中では殆ど扱われていない (例外的に Thank you for V-ing. という形でイディオム的には扱われている)。現在指導されている不定詞の場合には, 多くの場合, 前置詞を伴わなければ文法的ではないので (e.g. a tool for measuring angles vs. a tool to measure angles with), for を使った形をもっと積極的に指導すべきであると考ええる。

また, coordinate を用いた not + N は, 学習初期から使うことができ, かつかなりの問題を解決する力を持っている。例えば, ベットの話をしている, 「トカゲ」が言えない場合, not a snake と言えば, 聞き手は cat ではなく, snake と同じ reptile の lizard を思い浮かべてくれる確率はそれほど低くないと思われる (すなわち, not a snake によって, それが snake と同じ種に属するということが普通合意される)。日本語, 英語両語で連想する指示物に多少の相違はあろうが, 概ね同じであろうと期待される。また, 反意語のペアがある場合の概念の場合には, もっと直接的に伝えることができると思われる (e.g. left → not right, north → not south)。

さらに, WH 疑問文にかわる yes-no 疑問文や how about の構造も広く使用可能である。

表4 パラフレイズのための言語的リソース

holistic	
superordinate	person, animal (bird, fish. . .), plant (tree, flower), something, food (vegetable, fruit. . .), substance, material, object, container, instrument/tool/machine, furniture, clothes, building, body, disease, drug/medicine, place, time, movement, vehicle, statement, belief, study, feeling, sound, act, quality. . . a kind/type of
coordinate	(that) (look, sound, smell, taste/is) like, -like, not
subordinate	such as, for example
analytic	
physical	
color	black, white, green, yellow, brown, blue, red, gray. . .
size/shape	small/large, heavy/light an animal <u>like</u> a horse, <u>but</u> smaller <u>and</u> <u>with</u> longer ears (ASS)
shape	a blue bell-shaped flower (BLUEBELL) an object <u>shaped like</u> a box in which a baby sleeps and can be carried about (CARRYCOT)
functional	(that/which is) used for V-ing a person whose job/trade/work is V-ing/to V

others

how + adj

age-old, depth-deep, height-high/tall, width-wide, weight-heavy, area-large, distance-far

how much + V

weight-weigh, income-earn, price-cost/be

where/when/what time/why/what

address-live, birthday-be born, the time of arrival-arrive, the reason for V-ing-V, meaning-mean

how about

6. おわりに：可能性（課題）と問題点

以上、パラフレイズのプロセス及びその多様な言語的実現を概観し、パラフレイズという方略を指導する際の教育内容を考える基礎にはなったと思うが、まだまだ多くの課題が残されている。

(1) (方略とそれを実現する言語項目の) 選択と配列の問題

先にも少し触れたが、まず、パラフレイズの2つのプロセスとその様々な言語的实现について、それらの選択と配列をどうするのかという問題がある。holistic/analytic どちらを先に、そしてどのような言語的实现を優先して教えるのか。下位方略は全て同等に扱うのか。学習の単位はどのようなものになるのか。パラフレイズ以外の方略 (productive/receptive) も考慮すると、全体的な枠組みはどうなるのか。様々な課題がある。

例えば、概念・機能シラバスについて提案され (Brumfit 1981)、実践もされているように、構造・文法シラバスを主にしながら、方略シラバスをスパイラルに絡めていくということが考えられる。analytic 方略は、一度に全部学習するのではなくて、構造・文法シラバスの進捗に合わせて、その多様な言語的实现を、文法的に複雑さの度合いが低いものから順に、繰り返して学習していくことも可能であろう (e.g. a bird with a long neck/This bird has a long neck. → a bird that has a long neck)。

(2) 語彙学習の重要性

パラフレイズ方略を言語的に実現するのによく使われる構造、表現のパターンをいくら抽出して指導・学習しても、それだけでは、決してパラフレイズできるようにはならない。例えば、a person whose/X's job is...までをいくら学習しても、その後にくる言い方が分からなければ最も重要な部分が伝えられない。それは、構造・文法シラバスでの問題点でもあった。すなわち、I want to...をいくら学習しても、次の動詞句が言えなければ、意思伝達上殆ど役に立たない。さらにきめ細かなよく使われる語彙項目の抽出作業が必要となるが、結局のところ、広範な語彙学習を平行して行わない限り、パラフレイズはできるようにはならない、あるいは、循環的にパラフレイズを繰り返さざるを得なくなってしまうであろう。

例えば、動物、算数・数学の図形の名称といった概念の範疇単位で、パラフレイズを試みさせることによって、その範疇で必要となる語彙項目を繰り返し練習することができ学習を促進できるのか知れない (e.g. triangle/square/circle/side/right angle/equal/radius/

center/diameter)。

(3) 具体的コンテキストでのタスク化の必要性

どんな概念にどんな言語表現を使って言及するのが、意思伝達上の効率 (communicative effectiveness) がよいのかは、コンテキスト中の諸要因に依存しているので、具体的コンテキストで、distinctive concepts/attributes を選択、言語化する練習を含んだタスクを設定する必要がある。

また、実際に各下位方略とその言語的実現が、どのようなコンテキストでどれくらいの意思伝達上の効率を持つかを実際に生徒に実感させることが大切である。

さらに、本論では Tarone (1977) に従って acceptable なものに限定して考えてきたが、文法的に逸脱のあるものでも、effectiveness のあるものは指導の対象にするように発展させる必要があるのではないと思われる。

(4) 通常名詞で表現される概念以外のパラフレイズ、語彙的問題以外の問題解決のための方略の検討の必要性

本論では、語彙的問題に対処する方略、しかも名詞的概念を表す語彙上の問題に対処するパラフレイズの方略しか扱っていない。今後、他品詞、他の方略、さらには、文法の問題などに対処する方略の指導シラバスへと発展させていく必要がある。これまでのコミュニケーション方略の研究が、語彙的問題しか扱っていないことは、Ellis (1994:402) によっても指摘されているところである。

以下に形容詞、動詞および文法的問題についての例を示すことにする。

表5 語彙的問題 (形容詞、動詞) および文法的問題のパラフレイズ

語彙的問題：形容詞

My watch is 2 minutes <u>slow</u> .	My watch isn't correct. My watch doesn't tell the correct time. It's 2 o'clock now but my watch says 1:58.
Bill is <u>good at</u> sports.	Bill likes sports. Bill can play many sports very well.

語彙的問題：動詞

creep	move slowly, quietly
shove	push roughly
whisper	speak softly
tiptoe	walk quietly and carefully

文法的問題

疑問文が作れない	Is this your pen?	This is your pen?
	What did you do?	What is it that you did?
	Why did you do that?	Why is it that you did that?
	Could you tell me his phone number?	I want to call him.
受動態が作れない	English is spoken in many countries.	People speak English in many countries.

参 考 文 献

- Armington, S. (1994) Conversational strategies and the language learner. 『外国語教育論集』(筑波大学外国語センター) 16, 1-9.
- Bachman, L.F. (1990) *Fundamental Considerations in Language Testing*. Oxford: O.U.P.
- Bialystok, E. (1990) *Communication Strategies : A Psychological Analysis of Second-Language Use*. Oxford: Basil Blackwell.
- Blum-Kulka, S. and E.A. Levenston (1978) Universals of lexical simplification. Færch, C. and G. Kasper (eds.) (1983:119-139).
- Brown, H., C. Yorio, and R. Crymes (eds.) (1977) *On TESOL'77*. Washington, D.C.: TESOL.
- Brumfit, C.J. (1981) Notional syllabuses revisited: a response. *AL* 2, 1, 90-92.
- Canale, M. (1983) From communicative competence to communicative language pedagogy. Richards, J.C. and R.W. Schmidt (eds.) (1983:2-27).
- Canale, M. and M. Swain (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *AL* 1, 1, 1-47.
- Chen, Si-Quin (1990) A study of communication strategies in interlanguage production by Chinese EFL learners. *LL* 40, 2, 155-187.
- Cole, P. and J.L. Morgan (eds.) (1975) *Syntax and Semantics Vol.3 Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Dörnyei, Z. and S. Thurrell (1991) Strategic competence and how to teach it. *ELTJ* 45, 1, 16-23.
- Ellis, R. (1984) Communication strategies and the evaluation of communicative performance. *ELTJ* 38, 1, 39-44.
- Ellis, R. (ed.) (1987) *Second Language Acquisition in Context*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall International.
- Ellis, R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: O.U.P.
- Færch, C. and G. Kasper (1983) Plans and strategies in foreign language communication. Færch, C. and G. Kasper (eds.) (1983:20-60).
- Færch, C. and G. Kasper (eds.) (1983) *Strategies in Interlanguage Communication*. London: Longman.
- Fukuda, E. (1994) How successfully do Japanese learners of English compensate for their lack of linguistic competence? Unpublished B.A. Thesis, Faculty of Education, Okayama University.
- Grice, H. P. (1975) Logic and conversation. Cole, P. and J.L. Morgan (eds.) (1975:41-58).
- 平野絹江 (1992) 「英語教育と回避行動 (上) —スピーキングにおけるコミュニケーション方略の指導の重要性」『現代英語教育』7月号, pp.30-32。
- 平野絹江 (1993) 「コミュニケーションにおける『態度』の指導と評価—コミュニケーション方略を中心に」『現代英語教育』6月号, pp.12-15。
- Johnson, K. (1982) *Communicative Syllabus Design and Methodology*. Oxford: Pergamon Press.
- Kellerman, E., T. Ammerlaan, T. Bongaerts, and N. Poulisse (1986) System and hierarchy in L2 compensatory strategies. Scarcella et al. (eds.) (1990:163-178).
- Kellerman, E., T. Bongaerts, and N. Poulisse (1987) Strategy and system in L2 referential communication. Ellis, R. (ed.) (1987:100-112).
- Konishi, K. (1994a) An analysis of *Longman Active Study Dictionary of English* in terms of its word definitions: its pedagogical implications. Unpublished M.A. Thesis, Graduate School of Education, Okayama University.
- 小西廣司 (1994b) 「Communication strategiesと英語教育」第10回四国英語教育学会口頭発表資料。
- Levelt, W.J.M. (1989) *Speaking : From intention to articulation*. Cambridge, Mass.: M.I.T.
- Levelt, W.J.M. (ed.) (1993) *Lexical Access in Speech Production*. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- Longman Active Study Dictionary of English*. 1991. London: Longman.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 1987. London: Longman.

- Nakano, S. (1993) The use of compensatory strategies by Japanese learners of English. Unpublished M.A. Thesis, Graduate School of Education, Okayama University.
- Nelson, E. (1989) Teaching communication strategies. Unpublished manuscript, Minnesota English Center, University of Minnesota.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 1989. Oxford: O.U.P.
- Oxford Wordpower Dictionary*. 1993. Oxford: O.U.P.
- Paribakht, T. (1985) Strategic competence and language proficiency. *AL* 6, 2, 132-146.
- Poulisse, N. (1990) *The Use of Compensatory Strategies by Dutch Learners of English*. Dordrecht, Holland: Foris Publications.
- Poulisse, N., T. Bongaerts, and E. Kellerman (1984) On the use of compensatory strategies in second language performance. *Interlanguage Studies Bulletin* 8, 1, 70-105.
- Richards, J. and R. Schmidt (eds.) (1983) *Language and Communication*. London: Longman.
- Robinson, P.L. (1989) Procedural vocabulary and language learning. *Journal of Pragmatics*, 13, 4, 523-546.
- Savignon, S.J. and M.S. Berns (eds.) (1984) *Initiatives in Communicative Language Teaching*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.
- Scarcella, R. C., E.S. Andersen, and S.D. Krashen (eds.) (1990) *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House Publishers, Inc.
- 高塚成信 (1989) 「方略的能力の指導」 松畑熙一・高塚成信 (1989) 『英語授業を魅力的に』大修館書店, pp.178-187。
- 高塚成信 (1993) 「『コミュニケーションへの関心・意欲・態度』の評価：ケース・スタディ」『現代英語教育』6月号, pp.16-19。
- 高塚成信 (印刷中) 「コミュニケーション方略と誤り」(『松村幹男先生退官記念論文集』(仮称), 溪水社)
- Takehara, N. (1992) What relationship is there between paraphrasing in Japanese and composition in English? Unpublished B.A. Thesis, Faculty of Education, Okayama University.
- Tarone, E. (1977) Conscious communication strategies in interlanguage: a progress report. Brown, H., C. Yorio, and R. Crymes (eds.) (1977:194-203).
- Tarone, E. (1984) Teaching strategic competence in the foreign-language classroom. Savignon, S.J. and M.S. Berns (eds.) (1984:127-136).
- Tarone, E. and G. Yule (1989) *Focus on the Language Learner*. Oxford: O.U.P.
- Váradi, T. (1980) Strategies of target language learner communication: message adjustment. *IRAL* 18, 1, 59-71.
- Wilkins, D.A. (1976) *Notional Syllabuses*. Oxford: O.U.P.
- Willems, G. M. (1987) Communication strategies and their significance in foreign language teaching. *System* 15, 3, 351-364.
- Yule, G. and E. Tarone (1990) Eliciting the performance of strategic competence. Scarcella, R. et al. (eds.) (1990:179-194).

(平成6年11月2日受理)